

河野龍也・佐藤淳一・古川裕佳・山根龍一・山本良
編著『大学生のための文学トレーニング 近代編』

高橋, 亮
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/1525859>

出版情報 : 九大日文. 24, pp.77-80, 2014-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

◎書評

河野龍也・佐藤淳一・古川裕佳・山根龍一・
山本良 編著

『大学生のための文学トレー ニング 近代編』

TAKAHASHI
高橋 亮

私がまだ大学の学部生であった頃、数多くの学生が聴講に集まっていた、非常に人気のある日本文学の講義があった。そこでは毎回、授業の終盤に十分程の時間を設け、その時に取り上げていた文学作品に関して、自由な感想を書くという形式を取っていた。集められた内の一部は、次回には一枚のプリントへとまとめられて、授業の冒頭で先生の解説や補足、時には評価の言葉と共に紹介された。受講者である学生には、この時の先生からのコメントを心待ちにして、白紙のA3のプリント一面に自らの所感を書き綴る者も少なくなかった。

こうした、学生が自分の考えを文へと起こし、授業の内容へと積極的に反映させていくという学習の形は、正しく『大学生のための文学トレーニング』というタイトルを付けられている本書が、その出版における理念や目標としているものに、非常に似通っているように見受けられる。

この書籍は、「はじめに」の部分でも語られているように、「学生が参加できる授業作りを」念頭において作成されている。そして、「説得的に対象を「論じる」ため」のスキルを、「作業や議論を通じて教室で習得できる」ような工夫が為されているともされている。

本書における構成は、主にセクション1から3までの三つの章に分けられており、それぞれに五つの作品が収録されている。具体的なものとしては、一番初めの章である「文学理論の基礎概念」では、志賀直哉『小僧の神様』、国木田独步『鎌倉婦人』、横光利一『蠅』、太宰治『千代女』、佐藤春夫『女誠扇綺譚』。続く第二章「歴史のコンテクスト」においては、森陽外『舞姫』、田山花袋『少女病』、林夫美子『放浪記』、坂口安吾『真珠』、石川淳『焼跡のイエス』。そして、最後の章である「活字の外へ」では、夏目漱石『坊ちゃん』、樋口一葉『たけくらべ』、芥川龍之介『舞踏会』、井伏鱒二『山椒魚』、谷崎潤一郎『夢喰う蟲』となっている。

ここで挙げられている作品をまとめ毎に比較すると、一章が「八〇年代以降の批評理論の時代（テクスト論・読者論・都市論・身体論など）」、二章が「九〇年代以降の文化研究の時代（ジェンダー論・ポストコロニアル批評など）」、そして三章が「七〇年代までの作家論・作品論の時代」へとおおまかに合致している。このような、時系列に完全には準じない、ある種七〇年代への遡及的な配置とされている理由については、二・三章が実際の作品分析と調査の手法に言及しているのに対し、

一章はそれらを行っていく上で不可欠となる、研究的読解のための意識の確認を主としているためだと説明されている。

冒頭でも触れたように、本書がその編集において目的としているのは、文学作品の客観的な分析や読解の方法を、「文学」初心者としての大学生に提示することとされている。そのため、一章で用いられている作品では、いずれも「語り」、「人称」、「視点」、そして「作者」の問題が焦点化されており、批評を行うための基本的な在り方を、具体的な事例を通して学習できるような構成となっている。そして、こうした特定の読者層を念頭においた工夫は、収録作品の提示の仕方にも反映されている。

本書で取り上げられている十五編の作品は、それぞれその作者名やタイトルと共に、短い導入文が併記されている。その中から特徴的な例を挙げると、『小僧の神様』は「作者は神様ではありません!」、『女誠扇綺譚』は「探偵はあなたです」、そして『山椒魚』では「テキストは誰のもの?」となっている。これらからは、比較的柔和で冗談めいた語り口による、コンパクトかつ印象的な文章が用いられていることを、容易に窺い知ることができる。こうした特徴的な傾向は、読み手の興味を引きやすい一文を初めに示すことで、作品自体を知らない読者としての大学生に、対象への関心や好奇心を喚起させることが狙いであると思われる。

また、個々の作品における解説では、内容についての一般的な解釈の他に、作品世界に関わる新聞記事や写真、その周辺における言説や批評文など、同時代的な資料が複数付け加えられ

ている。これは、作品についての考察を進めるにおいて、一般の人々にも普遍的に諒解されている歴史的・文学的背景を踏まえた上で、更に理解を深めることを目的としていると捉えられる。ここでは、読み手である大学生へと、思考の典型化という恐れは含みつつも、主観的な感想や視点に拠らない、客観性と説得力を備えた結論を導き出すための材料が与えられている。

以上のように、本書は教材としての「親しみやすさ」と「使いやすさ」を主眼においた構成となっている。そして、こうした傾向が特に顕著に表れている点としては、本体としての「テキスト」に付属している、「トレーニングシート」の存在が挙げられる。

これは、テキストに収録されている作品に関して複数の設問が為されている、付属の問題集としての体裁を整えている。だが、この中で設定されている問題の形式は、一般的な問題集とはやや異なる傾向にある。トレーニングシートにおける問いには、採点としての正否の判断が可能な物もある一方で、その範疇から外れた物も数多く含まれている。例えば、志賀直哉『小僧の神様』の課題¹では、文中の表現における表面上の意味と、物語上での意味の相違を問題としている。同時に、その答えを読み手側の「想像」によって作成し、「隣の人と交換して互いに「解釈」を確認」する作業が求められている。また、佐藤春夫の『女誠扇綺譚』の課題では、解答者は作中の登場人物の立場に立った上で、物語の筋に添った文章を「創作」する、比較的自由度の高い問いも見受けられる。こうした、各自の意見を

幅広い形で表出し、他の人のものとの比較を通して討論する機会を与える箇所は、本書の製作理念である「学生が参加できる授業作り」を促進させるためのものであると判断できる。

今日、読書率の低下などから「活字離れ」が指摘されることもある若年層であるが、「Twitter」や「LINE」といった情報媒体が普及している現状では、文章による相互の意思疎通を行う機会は、増加の傾向にあると言える。そうした現在の社会的状況に対し、本書の編者は「はじめに」において、文学を扱う授業へと「書くことで参加したいという学生の意欲は健在」であるとしている。こうしたことから、この『大学生のための文学トレーニング』と銘打たれた本書が、従来の受講者に対する文学理論の一方的な教授ではなく、学生の持つ潜在的な創作意識へと働きかけることを通しての、自発的な意見表明を目的としていることが窺い知れる。

また、このような方針を用いている本書では、作品の読解を進めていく上での、「作者」の存在性を見直しもまた視野へと入れている。そして、そうした本書の全体に通底している方向性は、収録作品の一番初めにおかれている志賀直哉『小僧の神様』の導入文である、「作者は神様ではありません!!」にも端的に表されている。ここにおける「神様」とは、この一文が付随されている作品のタイトルや本文を踏まえつつ、近代における小説の管理者としての作者の存在性をも示している。

この作品の解説では、テクスト論を提唱したロラン・バルト、「個人Ⅱ主体」へ疑念を投げ掛けたミシェル・フーコー、読者

論を提示したヴォルフガング・イーザーの名前を列挙し、「作者の意図」を重要視することへの疑問を打ち出している。加えて、小説の書き手である作者と、小説の語り手は別箇の存在であるとして、読み手は「入れ子構造の（作者の意図）の迷宮」に迷うのではなく、作品自体の構造を注視するべきであるとしている。また、同様の箇所では、芥川龍之介『羅生門』の結末部である「下人の行方は誰も知らない」の一文について、次のような言及が為されている。

作者の言葉は読者に解釈されなければなりません。一方、読者の考える「下人の行方」が正解であるかどうかは書かれていません。小説の意味は作者と読者の間で宙づりになっています。物語世界とはある意味で不安定な空間なのです。

芥川龍之介および『羅生門』に関しては、本書の「はじめに」でも紙幅を割いて紹介されており、ここでは作中の語り手である「作者」は芥川龍之介本人ではなく、あくまでフィクションとしての存在であると強調されている。そして同時に、小説を読解する際には「作者ではなく（語り手）を意識して読む」べきだとする指針を、文学的考察の手法を学ぶに当たつての前提として示している。

このように、作品と作者の関係性における具体例として、本書で多用されている『羅生門』と芥川龍之介であるが、作家と

しての芥川はその自殺という印象的な最期に関して、作品と彼の死を関連付ける考察も、これまでに数多く行われてきた。だからこそ、作品における作者の問題について芥川龍之介へと言及することは、引き合いに出し易い著名な作家であるという要素の他に、こうした傾向に対するアンチテーゼとしての効果が期待されているようにも捉えられる。

以上のように、一貫して否定的な捉え方のされている「作者」の存在は、しかし本書では厳密には排除されてはおらず、その理由については次のように述べられている。

「作者」という概念を排除しないのは、結局のところ、ど

のような理論的立場に基づいて研究を行うかということ
は、個々の学生が自らの問題に応じて選び取れば良いこと
だと考えるからです。私たちは、この本がそうした研究の
入り口として活用されることを願ってやみません。

編者が「はじめに」の中で表したこの一文は、「文学」を学
び始める学生のために多様な考察の方法を提供する、本書の教
材としての特徴を簡潔に明示しているようにも受け取られる。

(二〇一二年一月 三省堂 二〇六頁 二二〇〇円＋税)

(九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年)